

01 パレスチナ問題について問われることがある。しかし…、パレスチナに問題があるのか？問題を起こしているのはパレスチナなのか？そこに誤解があるのではなかろうか。パレスチナを、時間という垂直軸と場所という水平軸の交点として捉るために、イスラエルの歴史を通して考えてみよう。

02 パレスチナは「ペリシテ人の土地」に由来する。

07 エジプトからイランに至る「肥沃な三日月地帯」と呼ばれる地域に、紀元前7000年頃に農耕文化が発達し、紀元前4000年頃、ナイル川、チグリス川、ユーフラテス川沿いに高度なメソポタミア文明が発達した。

ユダヤ教、キリスト教、イスラム教も、すべてこの地域で生まれた。

メソポタミアのカルデア地方、ウルは北部と南部どちらにもあって、どちらのウルか正確にはわからないが、河口に近いシュメール人の都市国家の方であろう。

「戒律を守れば汝ら一族の繁栄を約束しよう。カナンに行け。そこを汝らに与える」という神の声を聞いたアブラハムに導かれ、紀元前19世紀頃、ユーフラテス川を渡ってカナンの地にやってきた。もちろん、そこは無人の地ではなく、他の人々が住んでいた。

08 カナンは「低地」を意味するという説がある。

09 旧約聖書によれば、カナン人とはノアの孫カナンから生じた民を指しており、シドン、ヘト、エブス、アモリ、ギルガシ、ヒビ、アキル、シニ、アルワド、ツェマリ、ハマトの11の氏族を総称して「カナンの諸氏族」と呼び、イスラエル人とは区別されている。神はアブラハムに対し、彼の子孫にカナンの地を所有させると約束しており、これの障害となる原住民のカナン人は排除(聖絶)すべき存在として記述されている。

10 異なる神を信仰する二つの民が出会った場合、いくつかの結果がもたらされる。ひとつは、一方が他方を滅ぼし、民もその神も消滅する。もうひとつは、一方が他方を取り込む、ないし共存する。それぞれの神を、兄弟とか親子のような位置づけ、力関係に差があれば、強い方を親や兄とし、そうでない方を子や弟にする。

エジプトが多神教なのは、異端の神を信仰する人たちを滅ぼさなかったからである。ユダヤ人はエジプトで繁栄して増えたが、ヤハウェのみ崇め、他の神を信仰する者と調和しなかった。そのためファラオはユダヤ人たちを奴隸にしたのである。

出エジプトで紅海まで来ると、海が真っ二つに割れ、ユダヤ人たちはその間を渡っていく。追ってきたエジプト兵は逆巻く海にのまれてしまう。チャールトン・ヘストンがモーゼ役で主演したセシル・デミルの映画『十戒』(1956年・米)で有名なシーン。

11 シナイ半島の山に登ったモーゼは、神から二枚の石板に刻まれた十戒—①神は一つである、②偶像を崇拜してはいけない、③神の名をみだりに唱えてはいけない、④安息日を守れ、⑤父母を敬愛せよ、⑥人を殺すな、⑦姦淫するな、⑧盗むな、⑨偽証するな、⑩貪欲になるな—を授かった。

紀元前1000年ころ、サウルという王によってイスラエル王国が成立するが、統一王国と呼べるようになったのは、ペリシテ人を破り、エブス人からエルサレムを奪って首都としたダビデ王の時代。その息子のソロモン王がエルサレムに神殿を造った。

旧約聖書は歴史書ではないし、このような記述は“ユダヤの民と古代イスラエル王国の建国の物語”に過ぎないのだが、問題なのは、これを歴史あるいは歴史的事実だと信じている人がいるということである。

12 神殿建設などのため、ソロモンは重税を課し、民衆は苦しんだ。その不満が、後の分裂の原因になった。

13 旧約聖書はバビロンに捕らわれていた時期に完成された。

14 バビロンはとても栄えた街で、ユダヤ人も繁栄した。それゆえ、ペルシャに征服され、パレスチナへの帰還が許された後も、多くのユダヤ人が残った。旧約聖書を拠り所にしていたことで、民族的なアイデンティティを維持することができた。

15 アレクサンダーは征服した各地にギリシャ風の都市アレキサンドリアを建設し、ギリシャ文化を広めた。現地ペルシャの人間を行政官に任用したり、自らもペルシャ女性と結婚し、将兵にも勧めるなど、民族間の融和にも力を入れた。

アレクサンダーが32歳で死ぬと、帝国はマケドニア、セレウコス朝シリア、プトレマイオス朝エジプトに分裂。アレクサンダーの理想を受け継いだエジプトのプトレマイオス王は、アレキサンドリアに図書館を造るなどして、ヘレニズム文化の中心になっていく。自ら伝統的なファラオの衣装をまとい、各地にエジプトの神々を祀る神殿を建てた。

エジプトは、クレオパトラ7世の時代にローマのカエサルに滅ぼされ、パレスチナはセレウコス朝シリアの支配を経てローマの属国となった。

属国の統治をまかされていたユダヤ王ヘロデは神殿を再建。猜疑心が強く、「ユダヤの王となる子がベツレヘムに生まれた」と聞いて、二才以下の男の子を残らず殺すよう命じた。イエス親子はエジプトに逃れた。

イエスは、パレスチナ生まれだからパレスチナ人であり、母マリアがユダヤ人だからユダヤ人でもある。

16 苦しみの中にあるのに神による救いがないのは律法をしっかり守っていないからから、そう考えたユダヤ人たちは旧約聖書にある律法を厳密に解釈し、日常生活の細々したことまで規定するようになった。神がなぜそんな決まりを与えたのかすらわからなくなり、律法学者が力を持つようになる。

そういう風潮に疑問を持ち、「律法ばかりにこだわらず、もっと神を信じなさい、神の愛を信じなさい」と説いたのがイエス。彼は、自分こそ正しいユダヤ教徒だと考えていた。イエスの最初の弟子たちもユダヤ教徒で、ユダヤ教を否定してキリスト教を作ったのではなく、正しいと信じる基本にかえったユダヤ教をユダヤ人たちに説いたのである。

多神教のローマ帝国の支配下で、一神教を信仰するユダヤ人たちは二度にわたって反乱を起こした。

鎮圧後、エルサレムにユダヤ神殿がある限り反乱が収まらないと考えたローマは、これを徹底的に破壊し焼き払った。ユダヤ人はエルサレムへの立ち入りが禁じられ、多くが奴隸としてローマに売り飛ばされた。

17 トルコのタルススに生まれ、ローマの市民権を持っていましたパウロは、パレスチナには住んでいなかったが、ユダヤ人で、熱心なユダヤ教徒だった。アレクサンダーの征服によって成立したヘレ

ニズム文化圏では、国や民族にとらわれない広い視点でものごとを考える人が多く、ギリシャ語ができた彼は、イエスの教えをユダヤ人だけに説くのではなく、もっと広く布教することが使命と考えた。イエスや弟子たちの教えを書いた最初の新約聖書がギリシャ語なのはそのためである。ユダヤ教からキリスト教へ、それは選民思想の克服にほかならない。キリスト教への改宗によってユダヤ人になる必要はなく、割礼の義務もなくなった。

18 キリスト教が広まるにつれ、布教活動とセットにした方が支配に好都合かつ領域拡大にもつながると考えたローマはキリスト教を国教とする。

ローマに対する反逆罪でイエスを磔刑にしたのはローマなのだが、それをユダヤ人の仕業とし、キリスト教布教の宣伝材料としたので、ユダヤ人は「キリスト殺し」の汚名を着せられることになった。

中世のキリスト教国では、ユダヤ人の土地所有は認められず、利息をとつて金を貸すことも禁じられていた。ユダヤ人が金貸しを生業にするようになったのはそのためである。

貸した金は踏み倒され、国外に追放されたり殺されたりする。シェイクスピアの『ベニスの商人』は、キリスト教徒にとっては喜劇だが、ユダヤ人にとっては悲劇にほかならない。

1492年にヨーロッパ最後のイスラム王国が滅ぼされ、カトリックのスペイン王国が成立すると、ユダヤ人は改宗か國を出ていかを迫られた。貧しいユダヤ人らは出ていったが、財産がある者は残った。改宗したユダヤ人はマラーノ(豚)と呼ばれ、本心から改宗していないのではないかと疑われ、密告されては異端審判にかけられ、拷問で嘘の自白を強いられ、火炙りや国外追放の憂き目にあった。もちろん財産は没収された。スペインだけで3万人も火炙りにされた。

19 ユダヤ人は神ヤハウェに選ばれた特別な民であり、「戒律を守れば繁栄を約束しよう」という契約を神と交わした民族である。すなわち、ユダヤ人以外は神ヤハウェの恵みを与えられないということになる。

20 もともとムハンマドは大きな隊商を率いる豊かな商人だった。人生の意味や人々の不幸について思い悩んでは瞑想していたある日、目の前に大天使ガブリエルが現れ、神(アラー)の啓示を与えたのだった。

三つの宗教、とりわけユダヤ教とイスラム教は非常によく似ている。

イスラム教徒の義務は、①信仰告白(シャハーダ)「アラー以外に神はなく、ムハンマドはアラーの使徒である」と唱える、②礼拝(サラート)、③喜捨(ザカート)貧しい人のために金品を寄付する、④断食(サウム)イスラム暦9月(ラマダーン)に一ヶ月断食(夜明けから日没まで飲食しない)する。、メッカ巡礼(ハッジ)一生に一度、健康で経済にゆとりがあれば…。

イスラム教は旧約聖書も新約聖書も聖典と認めているから、中世ではユダヤ教徒やキリスト教徒に改宗を求めるようなことはなかった。

22 1789年にフランス革命が起り、「人権宣言」が採択された。ユダヤ人にも市民権が与えられ、植民地の奴隸制度も徐々に廃止されていくことになる。

絶対王制を維持していた他のヨーロッパ諸国は、市民革命が自国に及ぶのを恐れ、フランスを攻撃。祖国防衛に自ら立ち上がった市民を指揮したのがナポレオンであった。

オランダ、ベルギー、イタリアなど、ヨーロッパの他の国でもユダヤ人の市民権が認められるようになり、差別されたり殺されたりすることがなくなると思ったユダヤ人たちはヨーロッパ社会に同化

する努力をした。キリスト教に改宗した者も多い。

産業革命で機械化が進んだ。機械が人間に代わって仕事をするようになり、労働から解放された人々は楽になることはなかった。技術進歩の成果を享受したのは一握りの人たちだけで、大多数にとっては労働時間の延長、職場での自律性の低下、働く者の分断、実質所得の停滞を招いたのである。チャールズ・チャップリンが1936年の映画『モダンタイムス』で描いた問題は、この時期すでに芽吹いていた。

23 1894年、フランス軍のドレフュス大尉がスパイ罪で有罪になった。ユダヤ系の彼を、軍の反ユダヤ主義の連中がでっち上げたものであることが後になってわかった。【ドレフュス事件】

軍人になって命がけで国を守っても、国民として認められ、差別を受けずに平和に暮らすことはできない、ユダヤ人はそう思うようになった。自分たちの手で民族の故郷パレスチナに国をつくろう。その運動をシオニズム、その活動家をシオニストと呼ぶ。

ロスチャイルドなどユダヤ富豪がアラブの不在地主から土地を買ったりはしているが、それはほんの一部。パレスチナは「民なき土地」ではなかった。ユダヤ人が入植したところは無人で、後からお金を求めてアラブ人がやってきた…学校でそう教わるユダヤ人もいる。

24 列強は、植民地の富を吸い上げるだけでなく、白人の文化の方が進んでおり、遅れたアジアやアフリカの人々に自分たちの文化を与え、キリスト教を布教して文明化させるのが使命…と考えた。有色人種側も、白人文化への劣等感から、根拠のない人種差別意識を受け入れた。

英国は植民地インドへのアクセスルート上にあるトルコが邪魔だった。不凍港が欲しいロシアにとっても南下の妨げになるトルコは邪魔だった。

かつての大帝国も、今や「瀕死の病人」と呼ばれるあります。トルコはドイツ側に立って戦い、そして破れた。

25 トマス・エドワード・ロレンス、ピーター・オトワールがロレンス役で主演したのがデヴィッド・リーン監督の映画『アラビアのロレンス』(1962年・英)。ロレンスは国と軍に利用されただけなのか、それとも母国のために進んでその役割を担ったのか…。

26 英国はパレスチナでのユダヤ人居住地(ナショナルホーム)建設に好意的ではあるが、国家樹立までは言及していないかった。いずれにしても、英国の二枚舌、三枚舌外交である。

28 スエズ運河や油田など、英國の利権をアラブ人から守るには、パレスチナにユダヤ人が多くいたほうが好都合である。そう考えた英國は無制限の移民を認めた。1918年に6万人だったユダヤ人は、その後10年間で3倍になった。

29 この頃、中東で大油田が発見された。ドイツではナチス党が政権を握った。戦争の危機が迫っていた。英國はアラブの協力を必要としていた。

そこで1936年、パレスチナではアラブ民族の反乱が勃発し、ユダヤ人との衝突が激化。翌37年、英國のピール委員会はパレスチナをアラブ国家と小さなユダヤ国家(15%程度)、國際地域に分割する提案を行ったが、アラブ側に拒否された。

1939年5月、英國はパレスチナをユダヤ人国家にすべきという方針はとっていないこと、またパレスチナへのユダヤ人移民を制限する考えを示したが、こちらはユダヤ側に拒否された

30 人種とは、皮膚の色、髪の毛、瞳の色、骨格など人間の生物学的特徴、つまり主に外見で分

類した人間の種類である。民族とは異なる概念。

ナチスはユダヤやロマなどの民族をまるごと絶滅しようとした。

31 1939年9月1日、ポーランド軍によるドイツ領のラジオ放送局への攻撃(グライヴィツ事件—ドイツによる自作自演)を理由に、ドイツがポーランドに侵攻。ポーランドの同盟国であった英仏(イギリス・ポーランド相互援助条約・フランス・ポーランド相互援助条約)は3日に対独宣戦布告。

17日にはソ連も侵攻、東側を占領する。8月23日の締結した独ソ不可侵条約(モロトフ=リッペントロップ協定)の中にポーランドを分割占領する密約が含まれていた。

32 ユダヤ人を乗せた難民船が次々とパレスチナに着くが、入植者数をコントロールしようとする英國の艦船に追い返される。漂流し、中には沈んでしまう船も…。

パレスチナを目指すユダヤ難民を描いたのが、ポール・ニューマン主演、オットー・プレミンジャー監督の映画『栄光への脱出』(1961年・米)。原題の“Exodus”はそのまま「出エジプト」である。第二次大戦後、『十戒』やこの映画が制作された背景には、ユダヤの正義、イスラエル建国の正当性を下支えしようという要請が背景があったのではないだろうか。

33 当時のパレスチナの人口は約197万。そのうちユダヤ人は約60万人。3分の1に過ぎないユダヤ人が全土の56.5%をとることになった。

1947年11月29日に国連で分割案が通ると、パレスチナは内乱状態になった。

34 英国軍が撤退する前日、ダヴィド・ベン=グリオンがイスラエル建国を宣言した。それに先立ち、ユダヤ人の軍事組織はエルサレムへの補給路がアラブ人に攻撃されないよう、道沿いの村を攻撃して破壊した。これは正当なことなのか。テロではないのか。

36 アラブ5ヶ国の連合軍、兵力は15万3400で空軍も持っていた。対するイスラエルは3万。うち、武器を所持していたのは4割。武器、兵力、ともにまさるアラブ連合側は、簡単にユダヤ人らを地中海に叩き込めると思っていた。米国も、長くは持ちこたえられないだろうと考えていた。

ほぼすべての前線で負け続け、エルサレムも陥落したが、英國が国連に四週間の停戦決議を出した。その間に買い付けてあった武器が到着し、世界中のユダヤ人が義勇兵として参加。第二次大戦を戦い抜いたベテランが多く、すぐに武器を使いこなし、形勢を逆転。

エジプト国王ファルークI世は、もともと戦争する気はなく、アラブ諸国へのお付き合いで参戦した感じ。兵力3万5千はアラブ連合で最大だったが、実戦経験のない素人集団。補給も考えずに進軍したため、水も食料もなくなり、停戦するよりほかなくなった。エジプトが休戦協定を結ぶと、他の4ヶ国もつづいて戦争は終わった。

37 1952年、ガマール・アブドゥル=ナセルやアンワル・アッ=サダトなどの自由将校団がクーデターを起こし、ファルーク国王を追い出して無血革命に成功。

冷戦が始まっており、米国を中心とした西側陣営は、中東でもソ連を封じ込めようとしていた。イスラエル寄りの米国に不満を持っていたナセルはソ連に接近し、近代兵器を大量に購入。怒った米国がアスワン・ハイ・ダム建設の融資を取り消すと、ナセルは英仏が所有するスエズ運河の国有化、その利益でアスワン・ハイ・ダムを建設すると宣言した。

英仏はエジプトから武力でスエズ運河を取り返そうと計画し、イスラエルもそれに参戦。1956年10月29日、イスラエルの仕掛けで戦争が始まった。

エジプトは、戦争には負けたものの、国際世論を味方につけ、ナセルは政治的に勝利。第三世界のリーダーの一人として、ユーゴのチトー、インドのネルー、中国の周恩来とともに非同盟主義を推進。

38 ソ連は、エジプトがイスラエルに勝てば米国に対して中東で優位に立てる考え、イスラエルが戦争の準備をしているとナセルに偽情報を流した。

真に受けたナセルは、国連軍を追い出してシナイ半島に軍を集め、アカバ湾を封鎖。

1967年6月5日、イスラエル軍はエジプトの空軍基地を攻撃、3時間で無力化した。シナイ半島に展開したエジプトの戦車部隊も、空からの援護がなければ裸同然。あつという間に壊滅。6月10日、両国は国連停戦決議を受諾。イスラエルの完全勝利だった。

ヨルダン領だった東エルサレムも奪い、イスラエル領は4倍になった。

39 エジプト、シリア、ヨルダンに頼っていてはパレスチナ領土は永遠に戻ってこないだろう。パレスチナ人はそう考え始めた。

アラファトは決死のゲリラ隊を募り、ヨルダン川を渡ってイスラエルの支配地域でゲリラ活動を開。民族意識が高まったパレスチナで、ヤーセル・アラファトは英雄になり、議長となった。

1968年3月21日、イスラエルの大軍が掃討戦を開始したが、貧弱な武器で追い返す。イスラエルに対するアラブ人初の大勝利だった。

アラブ中のゲリラがPLOの本拠地ヨルダンに集結。ヨルダン国王フセインI世と対立するようになる。

PLOは様々なゲリラ組織だけでなく、労働組合など、稳健派から過激派まで含んでいる。当初はイスラエルを国家と認めず、テロや武力で解体しようとしていたが、パレスチナとイスラエルを分割し、平和共存を図る方向に徐々に移行。

1943年にフランスから独立したレバノンはキリスト教徒が多数を占める国で、ユダヤ教徒、イスラム教徒らも共存が許されていた。各宗教の人口比により、大統領はキリスト教マロン派、首相はイスラム教スンニ派、国会議長はイスラム教シーア派、国会議員はキリスト教対イスラム教が6対5と、1932年の人口調査をもとに定めていたが、イスラム教徒の増加で人口比が変わり、やつてきたPLOと組んだイスラム教徒はキリスト教徒との間で内戦を始めた。アラファトは1万5千のゲリラとともにチュニジアに。

40 ヨルダン内戦を調停したエジプト大統領ナセルが死去。副大統領サダトが後を継いだ。ナセル路線を継承すると思われていたサダトはソ連よりの路線を転換して米国に接近。占領されていたシナイ半島を、米国の支援で奪還しようとした。

イスラエルに対し、占領地から撤退し、パレスチナ人の自治を認めれば和平協定を結ぶと提案したが、「パレスチナ人など存在しない。だからパレスチナ問題もない。私たちは無人の荒野に国を造った」というイスラエルのゴルダ・メイア首相は占領地を返す気はなかった。残された道は戦争だけだった。

1973年10月6日、イスラエルの休日(贖罪の日)にエジプト軍はスエズ運河を渡ってシナイ半島のイスラエル軍を攻撃。同時にシリアはゴラン高原に侵攻。イスラエルは完全に不意を突かれた。空軍が反撃しようとしたが、エジプト軍は運河から12キロ、自軍の対空ミサイル射程内で停止。しかしそのため戦力をゴラン高原に向けることができた。

ゴラン高原で苦戦するシリアが前進を要請、ソ連も圧力をかけてきたので進撃したが、3時間で戦車250両がイスラエル空軍の餌食になった。アリエル・シャロン将軍が率いる部隊がスエズ運河を渡って背後に回り込み、シナイ半島のエジプト軍を孤立させた。米国はイスラエルの反撃が成功するのを待って停戦を提案。

41 サダトはシナイ半島全域の奪還もイスラエルの抹殺も考えていなかった。イスラエルの不敗神話を破ることで、イスラエルも米も和平に無関心でいられなくなるという狙いだった。米を仲介役にして和平を手に入れるための戦争であった。

この戦争で、アラブ側は石油を武器にした。アラブ諸国から石油を輸入する国を、友好国、非友好国、敵対国の3つに分け、友好国にだけ石油を売ると宣言。同時にOPEC（石油輸出国機構）が原油価格を4倍に。これがオイルショックである。非友好国に分類された日本は慌ててアラブ寄りの政策に転換したものの、1974年、戦後初めてマイナス成長を記録。

戦争の失敗の責任でゴルダ・メイア内閣が倒れ、メナヘム・ベギンが首相になった。占領地を返す気のないベギンはシナイ半島にも入植地を造り始める。和平交渉に行き詰ったサダトは、1977年11月、イスラエルに行って直接ベギンと交渉することに。イスラエルに公式に行くということは、イスラエルという国の存在を認めていることになる。これまであり得ないことだった。

サダトはイスラエルで大歓迎され、国会で占領地からの撤退とパレスチナ人の自治権を認めることが条件の和平安を訴えた。ベギンは答えなかった。

ジミー・カーター米大統領の仲介により、1973年3月26日、ホワイトハウスでエジプトとイスラエルの平和条約が結ばれた。その功績で、サダトとベギンはノーベル平和賞を受賞。

42 1979年、イランでイスラム革命が起き、パーレビ王朝が倒れる。革命を指導していたのは、パリに亡命していたイスラム教シア派の法学者アヤトラ・ホメイニ。帰国して最高権力者になった。

同年、イラクではサダメ・フセインが大統領に。イランと国交断絶した米国はイラクを反共とイスラム革命の防波堤として注目。翌80年、革命のゴタゴタに乗じてイランを攻撃する。愛国心に奮い立ったイランの反撃を受け、戦争は長期化。イラクは負けそうになるが、反米イスラム革命が湾岸諸国に広がることを恐れた米国は積極的にイラクを支援。石油輸出で得た資金で世界中から武器を買いまくったイラクは軍事大国に。米は化学兵器や細菌兵器も売った。フセインはイランに協力したクルド人ら5000人を、その毒ガスで殺戮した。88年、8年にわたる戦争で疲弊した両国は国連の停戦決議を受け入れた。

1973年のクーデターで王制が取れ、78年に社会主義政権が生まれたアフガニスタンでは、イスラム教への弾圧に対する反乱が起こり、翌79年にソ連が軍事介入。ムジャヒディンとの10年戦争はソ連の瓦解にもつながった。

1987年12月8日、ガザでイスラエル軍のトラックが交通事故を起こし、パレスチナ人4人が死亡。怒った18歳の少年が石を投げたところ、イスラエル軍は実弾射撃で少年を殺害。これがきっかけで、子どもや若者はイスラエル軍に投石するようになり、またたく間に広がった。

43 サダメ・フセインは国民にイラク戦勝利を公言していたが、領土も賠償金もなく、兵士の処遇にも困っていた。

オスマン帝国時代、イラク領だったクエート併合を考え、1990年8月2日にクエートに侵攻。8日に併合を宣言。12日には「イスラエルのパレスチナ侵略を容認しながら今回のクウェート併合を非難するのは矛盾している」と主張。イスラエルのパレスチナ退去などを条件に撤退すると発表。

10月8日、エルサレムで20人のアラブ系住民がイスラエル警官隊に射殺されるという中東戦争以後最大の流血事件が起こり、フセインは激しく非難。PLOはイラク支持の立場を表明したが、クエートやサウジアラビアからの支援を打ち切られることになった。

翌91年1月17日、米軍を中心とした多国籍軍の武力行使開始。イラクはイスラエルとサウジアラビアに向けてスカッド・ミサイルを発射。

2月28日、イラクは無条件降伏した。

44 湾岸戦争に勝利したジョージ・ブッシュ米大統領は、Land for Peace（土地と平和の交換）、イスラエルが占領地から撤退すれば、アラブ諸国はイスラエルの生存権を認めてテロをやめ、和平を結ぶと主張、1991年10月30日にマドリッドで中東和平会議を開いた。ヨルダン、シリア、レバノン、エジプトに加え、パレスチナ代表も参加したが、PLOもアラファトも参加させなかつた。

「あの土地は神がユダヤ人に約束した土地で占領地ではない。もともとアラブ人の土地ではない」と考えるイスラエルのシャミル首相には、返す気などなかつた。

92年、パレスチナ、アラブ諸国との和平成立を公約に掲げたイツハク・ラビンが首相に選ばれ、オースロでイスラエルとPLOの間で秘密和平交渉が持たれ、合意に至る。93年9月13日、ビル・クリントン米大統領立ち会いのもと、ホワイトハウスで調印式がおこなわれた。

アラファトとPLOはガザに帰還し、暫定政府をつくる。

95年11月4日、イスラエルの和平推進派がテルアビブで集会を開いた。和平反対のユダヤ人男性が参加していたラビンをピストルで射殺。後継者のペレスが和平推進を図るも、誤ってハマスの指導者の一人を暗殺、ハマスは通勤バスに自爆攻撃を次々しきけ、ペレスの支持が低下、96年の総選挙でベンヤミン・ネタニヤフに負けた。

45 イエスが磔刑にされたゴルゴタの丘はキリスト教徒地区にあり、聖墳墓教会が建っている。神殿の丘の西側には紀元70年に破壊されたエルサレム第二神殿（ヘロデ王が再建したもの）の遺跡で、ユダヤ教第一の聖地「嘆きの壁」がある。丘の上にはイスラム教の第三の聖地、ムハンマドがその岩から昇天したとされる「岩のドーム」やアルアクサ・モスクがある。イスラエルのユダヤ人、パレスチナのイスラム教徒にとって、丘の主権を手放すことには抵抗がある。

46 1999年、和平反対派のネタニエフを破って和平推進派のエーフード・巴拉クが首相になった。巴拉クは驚くべき譲歩の姿勢を見せたが、アラファトは妥協しない。

「巴拉クはアラファトに妥協しすぎだ。エルサレムはイスラエルの永遠の首都。分割するとか主権の委譲とか、とんでもない」と、和平交渉中、タ力派のリクード党党首シャロンが武装警官に守られて「神殿の丘」に足を踏み入れた。シャロンのシャロンの挑発によって第二インティファーダが始まり、和平はご破産になった。

47 和平に失敗した巴拉クは2001年の選挙でシャロンに完敗。

若者を自爆要員にリクルート。「この世は仮だ。天国に召されて初めて本当の生に出会えるのだ。自爆テロで殉教者（シャヒード）になれば天国に召され、永遠の生が約束され、アラーにお目通りも許される。家族のことは心配するな。1万ドルの一次金も出し、毎月の生活費も我々が面倒をみる」と。

だがイスラム教は自殺や武装していない無実の人を殺すことを禁じている。自爆テロで天国に行けるというのは真っ赤な嘘ということになる。信じるか信じないか、論理を必要としないがゆえに

宗教は利用されやすい。

なぜ若者は自爆テロに志願するのか。絶望である。勉強しても、学校を卒業しても、仕事に就けない。将来に対する希望を失ってしまうからだ。将来に希望があれば貧乏でも耐えられる。ハニ・アブ・アサド監督の映画『パラダイス・ナウ』(2005年・仏/独/蘭/パレスチナ)を見てほしい。

クリントン前大統領と違い、ジョージ・ブッシュ・Jr米大統領は中東和平に無関心だった。

48 ブッシュは「テロリストやテロ国家が米国を攻撃しようとしているなら、向こうが攻撃してくる前に、こちらが先に攻撃するのは当たり前。イスラエルの場合も同じ」と、シャロンのテロ対策を支持。シャロンもアメリカの「テロに対する戦争」に同調し、戦車でガザ侵攻。

中東和平に無関心だったブッシュだが、アラブ諸国の支持をとりつけようと和平交渉に乗り出した。アラファトは信用できないので、新たにパレスチナ自治政府首相のポストをつくり、マフムード・アッバースが就任。2003年3月、ヨルダンのアカバで和平会談を開いた。そのロードマップは、

第一段階(2003年5月まで)=パレスチナはイスラエルの生存権を認め、テロを停止。イスラエルはパレスチナを主権国と認め、ガザ地区とヨルダン川西岸地区から軍を撤収。入植活動を凍結。

第二段階(2003年6月～12月)=パレスチナが憲法を制定、暫定的な国境線を持つ独立国家を樹立。

第三段階(2004年～2005年)=エルサレムの主権などの問題を解決して関係を正常化。

タ力派のシャロンの下でロードマップがうまくいくはずがない。ブッシュの圧力で首相になったアッバースは米の操り人形だと思われていたから、シャロンとアッバースは一応ロードマップを受け入れたが、テロは一向にやまない。

49 イスラエルにテロリストを侵入させないという名目で、ヨルダン川西岸にコンクリートの壁を築き始めた。

50 右の図で、赤実線は壁の建設が完成した部分、赤点線は建設中、黒点線は計画線。

51 パレスチナ側に食い込んでいるのは、ヨルダン川西岸にあるユダヤ人入植地を壁の向こうのパレスチナ側に残さないため。

買い物、通勤通学ができなくなった者が続出。

2008年12月から多数の侵入者を射殺している自動砲塔は非人道的AI兵器(軍事用ロボット)の典型として非難されている。

世界中から「アパルトヘイト壁」と非難されているが、イスラエル政府は聞く耳を持たない。

53 ハマスに勢いを与えてるのはイスラエルとも言える。

55 むしろホロコーストは絶対悪から相対化した犯罪になってしまう危惧がある。皮肉なのは、それがイスラエルによるものだということだ。

56 たとえばウクライナ戦争も、ウクライナ国内のロシア系民族が自治を求めて独立し、ロシアがそれを承認。無理はあるが、独立した国をロシアが併合するという形をとっている。しかしイスラエ

ルは一方的に占領し、領土拡大を図ってきた。

南アフリカは、ガザ地区におけるイスラエルの軍事作戦がジェノサイド（集団虐殺）に当たるとして、国際司法裁判所に提訴した。イスラエルがガザ「破壊」を計画しており、「国家の最高レベル」が立案に当たったという主張である。イスラエルにジェノサイドの意図があつたのかどうかの証明が必要で、審理には時間を要するかもしれないが、どの国も民間人殺戮を非難するだけにとどまっている中、南アフリカの行動は、人命尊重と問題解決のための判断と行動だといえよう。

国際司法裁判所は、1月26日、イスラエルに対し、パレスチナ自治区ガザ地区でのジェノサイドを防ぐためにあらゆる対策を講じるよう、暫定的に命じた。残念ながら戦闘停止は命じられなかつた。これに対し、イスラエルは、ジェノサイドではなく、ハマスによる昨年10月7日の襲撃に対するもので、正当だと主張している。つまり、今後も継続するというわけだ。

57 ドイツ政府は、ユダヤ人大量虐殺を犯した過去の反省をし続けるためにはイスラエル批判をしないということなのか、第三国として裁判に介入し、イスラエルを弁護するという立場に経とうとしている。メルケル首相時代、移民に門戸を開くことで確かな地位を築いたのに、国際社会の評価を大きく落とすことになった。

歴史上、過ちを犯さなかった国がどれだけあるのか。その国だけが侵略戦争や人権侵害、ジェノサイドを告発する資格があるとすれば、国際社会の秩序は成り立たないし、国連も不要である。ホロコースト批判もまた、然りである。

58 新聞、ラジオ、テレビ、インターネット…、情報伝達の範囲と速度が大きくなつた。人は、読んだものより聞いたこと、見たことに、より大きな影響を受け、信じやすい。写真や映像と自分で見たものを混同しがちである。しかし、写真や映像を加工・創作する技術ができたことにより、事実とは違うものが流布するようになった。

理論的思考の間違いは理性によって正せるが、思いの底に植え付けられたイメージの払拭は容易ではない。